

バイオハザード —約束 のサムライエッジ—

オリーブドラブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Resident Evil —Promised Samurai Edge—
1998年、9月下旬。T—ウイルス感染によりラクーンシティが大混乱に陥る中、
新人警官のカイル・グリーンホークは、同僚のエドガーや女子大生のノエルらと共に、生存者達の救助に励んでいた。

だがその奮闘も虚しく、ゾンビに囁まれたエドガーが命を落としてしまう。さらに生き残ったカイルとノエルの前にT—103「タイラント」が現れ、絶体絶命のピンチとなってしまった。

しかしその時、カイル達がこれまで助けて来た生存者達が現れて――!?

（本作は完結後、暁、エブリスタでも掲載する予定です。また、挿絵はスマートフォンア
プリ「カスタムキャスト」で作成しております）

目次

前編 A T T A C K O F T Y R A N

T

後編
REVENGE
OF SURV

7

前編 ATTACK OF TYRANT

1998年、9月下旬。

猛火に包まれ、阿鼻叫喚の煉獄と化した街に、銃声が轟く。理性なき暴徒が斃れ、人が死ぬ。今となつては、よくあることでしかない。

ラクーンシティに発生したT—ウイルスの感染による大混乱は、留まることなく拡大し続けていた。もはやこの街に安全な場所などなく、今生きている人々は絶え間なく戻達の脅威に晒され続けていた。

「カイ、ル……逃、げろっ……」

「エドガーツ……！」

それは、闇夜を照らすように燃え盛る街道の中で、市民を守らんと戦い続けていたラクーン市警——R·P·D·の警官達も、例外ではない。鮮血と煤に汚れた手で横たわる同僚を抱く、カイル・グリーンホークもその一人だった。

艶やかな銀髪を靡かせる彼は、友の金髪を撫でるようにその頭を抱え、力無く声を掛ける。誰が見ても、同僚——エドガー・ロジャースはもはや、手の施しようのない状態だつた。

こんな事態にさえ、なつていなければ。今頃は、晴れて自分達の後輩としてやつて来るレオン・S・ケネディを、快く迎えていたはずなのに。今となつてはもう、彼の安否すら分からぬ。

「エドガー、しつかりして！　あなた、もうすぐ彼女と一緒になるつて……！」

「……だからこれから、一緒になるのさ……ノエル。俺の彼女ならもう、とっくに……」

「そんなつ……！」

そんな2人の警官と行動を共にして、他の生存者達を守るために戦い続けてきた、ラクーン大学の女学生——ノエル・スプレイグ。

黒のトップスとホットパンツという大胆な格好ながら、ショートボブに切り揃えたブランウンの髪を靡かせ、亡者達と渡り合ってきた彼女だが。その活躍は、カイルとエドガーの支えがあつてのもの。

愛用のM_{ガバメント}1911A1を握る白い手を震わせて、彼女はただ死にゆく仲間を看取ることしかできずにある。

「……けどな、困つたことにこのままじゃあ、向こうでも彼女とは一緒になれねえんだ。なあ、カイル」

「……ああ、分かつてる」

血みどろの警官は最後の力を振り絞るように、震える拳を友の胸に当てる。ラクーン

警察署から押借りてきた、S.T.A.R.S.の装備である緑色のベストを纏うカイルは、その拳を握りながら頷くと——手にしたM92Fの銃口を、エドガーの額に向けた。

それは、ただのM92Fではない。S.T.A.R.S.への入隊を希望していたカイルは、その射撃の腕をS.T.A.R.S.隊員のフォレスト・スペイヤーに見込まれていた。

その彼から餞別として預かっていたのが、今ここにある「サムライエッジ」なのだ。カイルは先の洋館事件で殉職した彼に代わり、この銃に相応しい警官になると誓っていたのである。

「……約束したんだろ、あの人と。だつたら……これ以上、イタズラにゾンビを増やすようなマネはしないよな」

「ああ……もちろんだ」

エドガーは戦いの中すでにゾンビに噛まれ、T—ウイルスに2次感染している。その知識がなくとも、彼はどうに理解しているのだ。

もはや自分は、あの屍達の仲間になるしかないのだと。ならばもう、警官として、友として。カイルに付けられる「ケリ」は、一つしかない。

「あばよ、親友。S.T.A.R.S.以上の、ヒーローになれ」

それが、最期に残された言葉であり。カイルにとつて決して違えてはならない、もう一つの「約束」となっていた。

次の瞬間には乾いた銃声と共に、血飛沫が噴き上がり。エドガーはゾンビになることなく、この事件の犠牲となつた恋人の元へと旅立つていた。

「カイル……」

「……行こう、ノエル。俺達まで死ぬわけには……!?」

親友を自らの手に掛けたカイルの背に、ノエルは掛けた言葉を見つけられずにいる。

そんな彼女を勇気付けるように、エドガーの目蓋を閉じさせたカイルが勢いよく立ち上がつた——その時。

後方からコンクリートが碎け散るかのような、凄まじい衝撃音が響き渡つたのである。その轟音に思わず振り返つた2人は、戦慄した。

「なッ……!?

一見すれば、暗緑色のコートを着た巨漢。だが、その眼はゾンビ達と同様に、理性の光がまるで感じられない——「怪物」の色を湛えているのである。

何より、コンクリート壁を体当たりで破るその脅力。明らかに人間ではないし、自分達に友好的な存在であるとも思えない。

その疑念を確信に変えるように——トレンチコートの巨漢は、カイル達と視線を交わ

した瞬間に突っ込んで来た。

「ノエルッ！」

「くツ……なんなのコイツッ！」

エドガーの死を悼む暇すらなく、戦いの幕が上がる。カイルとノエルは同時にM92FとM1911A1を構え、発砲を開始した。

——が、やはり今までのゾンビとは訳が違う。何発もの弾丸を叩き込まれながらも、トレントンチコートの巨漢は怯む気配すらなく突進し続けていたのだ。

「くツ！」

「うツ……!?」

その巨躯に物を言わせた体当たりをかわし、背後に転がり込んだ2人は再び銃口を向ける。

だが、その引き金を引くよりも先に。振り向きざまに振るわれた裏拳が、彼らを容易く吹っ飛ばしてしまうのだつた。

「ぐあつ……！　ノ、ノエルッ！」

「きやあつ！　だつ、大丈夫……まだ、いけるッ！」

アスファルトの上を転がりながらも、なんとか立ち上がった2人は諦めることなく銃を取る。だが、戦力の差は歴然であつた。

T—103——「タイラント」。アンブレラ社によつて開発された究極のB·O·Wにして、「暴君」の名に相応しい破壊力を持つ強力な個体。

その圧倒的な力の前には、ハンドガンを構えた新人警官と女子大生など、取るに足らない存在でしかない。だが、自らに敵意を向ける生存者をみすみす逃すような温情などないのだ。

じりじりと近づき、今度こそ確実に殺すと言わんばかりの眼光を放つ巨漢。その暴力の体現者に、カイルとノエルは死を覚悟する。

——その時だつた。

後編 REVENGE OF SURVIVORS

——突如、この場に轟く銃声。その主はカイルのM92Fでも、ノエルのM1911A1でもない。

「えつ……!?」

「あのコート野郎が……!?」

その謎の銃声にハツと顔を上げる2人の前には、タイラントが予期せぬ奇襲に怯む姿があつた。どうやら、自分達以外の誰かが、この巨漢を攻撃したらしい。

「カイル、ノエルッ！　くたばるにはまだ早いぞッ！」

「その声……まさか!?」

焼け焦げた廃車の陰や、建物の屋上、破壊されたコンクリート壁の奥から続々と現れた、その乱入者達の姿に——カイルとノエルは、瞠目する。

「デカい怪物がいるかと思えば、まさかお前らが狙いだつたとはな。……当てるのが楽そうな的で助かる」

「エドワイン……！」

「よく見ておけ、カイル。至近距離での射撃というのは、こうやるのだ！」

コンクリート壁の大穴から飛び出して来た、筋骨逞しいスキンヘッドの黒人男性——エドワイン・サンチエス。かつては歴戦の軍人として戦場を渡り歩いていた彼は、軍を退いた今でも衰える気配のない腕前を披露していた。

その太い手に握られたレミントンM870・ワイングマスターの銃口が、火を放つ時。至近距離故に高い火力を發揮するショットガンの洗礼を浴び、タイラントは僅かにたじろいでいた。

「……かつて私は、あなた達に救われた。人々を救うべき医師として、その恩に報いないわけには行きません」

「ライアン！　来てくれたのね！」

「医師が真っ先に逃げ出しては、誰一人救えませんからね。それに気付かせてくれたのは、あなたですよ……ノエル！」

ブラウンの髪を靡かせる、白衣の青年——ライアン・ハワード。見掛けは華奢だが、テンポ印シント社製のクロスボウ・ステルスNX-Tを握るその姿は、1人の戦士としての勇ましさを感じさせている。

建物の屋上からタイラントに狙いを定め、引き金を引くその眼差しは、矢に勝る鋭さを帶びていた。

「ノエル、無事!?　——つて、なんのよコイツッ!?　ジョン、とにかく加勢しないと!」

「か、加勢つたって……効くの!? 撃つてもちゃんと効くのアレ!?

「つべこべ言うな！ 口より先に手を動かしなさいッ！」

「シルファ!? ジヨンまで……どうしてここに！」

「この前、あんた達に助けられた『借り』を返しに来たの！ こんな場面に出くわすとい
て、知らんぷりで逃げるなんてシヤクだからねっ！」

「お、俺は2人で逃げようつて……」

「何か言った!?」

「いっ、言つてないですうう！」

燃えるような赤髪をウエーブショートに切り揃えた、勝気な美女——シルファ・カーレイン。その脇で震えながら銃を構える、褐色の肌を持つ黒髪の青年——ジヨン・エリオット。

彼ら2人はノエルと同じラクーン大学の学生であり、ゾンビ達の襲撃に遭つていたと
ころをカイル達に助けられたことがあった。が、どうやら彼らは自分達の脱出より、恩
人達への協力を选んだらしい。

「ホラしつかり狙つて、ちゃんと撃つ！ 無事に脱出来たら、デートしてあげるつて約
束忘れた!?」

「わ、忘れてないよつ！ や、やるよ、やれば良いんだろ、やつてやるよおお！」

「その調子！ 素敵よ、ジョン！」

シルファに発破を掛けられ、ジョンはケンド銃砲店から拝借していたレミントンM S Rを、廃車の陰から撃ち続けている。そんな彼の傍らで、シルファ自身もSIGザウエルP228の引き金を、絶えず引き続けていた。

「シルファ先輩、ジョン先輩！」

「ルーク！ あんたまでどうしてここに……！」

「僕はカイルさん達の姿が見えたから、あの時のお礼に弾薬を渡そうと思つて……もしかして、先輩達も？」

「考えることは同じみたいね。ジョン！ 可愛い後輩が見てる前でくらい、カツコいいところ見せなさい！」

「わ、分かつてるつてばあああ！」

「……事情は分かりました。ノエル先輩、僕も加勢しますッ！」

「ルーク……！ ありがとう、助かるわ！」

その攻勢に、もう1人の若者が加わる。ラクーン高等学校に通う高校生だった、金髪の美少年——ルーク・ステルベンだ。

彼もまた、過去にカイル達に救われた生存者の1人であり。その両腕に抱えたP90を武器に、救援に駆けつけて来たのである。

——さらに。廃車に身を隠すシルファアとジョンに加勢したのは、彼だけではなかつた。

「それにしても、P90なんてどこで見つけて来たのよ。あの銃砲店にそんなシロモノ……」

「俺の装備だ。……カイル達を救う為に必要、と聞いてな」

「うわあ!? あんた誰え!？」

「僕に協力してくれた傭兵の方ですよ。……ありがとうございます、ユウスケさん。これ、凄くしつくり来るんです」

「比較的コンパクトな火器だからな。小柄なお前でも、十分に活用出来るはずだ」

ルークと共に駆け付けて来た、野戦服を纏う黒髪の男性——ユウスケ・ユキハラ。かつてカイル達と共に、盲目の怪物「リツカー」と戦った経験を持つ傭兵であり。彼らに「借り」を返すという、同じ目的で動いていたルークと出会ったことをきっかけに、ここまで辿り着いていたのである。

「……あいつらを死なせるわけには行かん。俺達の弾幕で押さえ込むぞ」

「はいっ！」

「なーによ、いきなり出て来て仕切り出しちゃってさ。……ま、やることには賛成だけどね！」

長い戦いの中で弾薬を使い果たし、武器としての役目を終えたM4カービンを投げ捨てて。

最後に残されたSIGザウエルP226E2を構えるユウスケは、戦いに不慣れな民間人達を鼓舞するように、引き金を引き続けていた。そんな彼の姿に刺激されたのか、シルフアヒルークも、より勇ましい貌で愛銃を握り締めている。

「ち、ちくしょおおつ！ 当たれ、当たれええ！」

「目を閉じるな、照準をよく見る。戦場では、目を背けた奴から死んでいく」

「え、縁起でもないこと言うんじやねええ！」

一方、眼前で暴れ狂うタイラントの迫力に気圧されていたジョンは恐怖の余り、瞼を閉じたまま引き金を引いていた。

視覚を封じて銃を撃てば、その分だけ狙いがぶれてしまう。ユウスケは片手でSIGを撃ちながら、もう片方の腕でジョンのMSRを廃車のボンネットに押さえ付け、照準のばらつきを抑えていた。

「よし、いいぞ……狙いが安定してきた」

「うつ、うるせえよっ！」

彼の補助もあり、ようやく徐々にタイラントという「現実」と向き合い始めたジョンは——ガールフレンドの前で格好良いところを見せて来たユウスケを睨みながらも、複

雑な表情を浮かべている。

「……ユウスケの奴め、軍を抜けて何をしているのかと思えば。まさかアイツまで、ノエル達に借りがあつたとはな」

それと時を同じくして、そんな彼らの様子を屋上から一瞥する者がいた。

ライアンの隣に立ち、小脇に抱えたH & K M P 5を撃ち続ける「彼女」は、かつての同僚を切れ目の眼差しで射抜いている。ポニー・テールに結われた艶やかな金髪を揺らし、サブマシンガンの引き金を引く絶世の美女は、その肢体の各部に包帯を巻いていた。「ダンテス中尉、無理をなさっては傷に障りますよ」

「ああ……だが、いつまでも寝てはいられないからな。ハワード先生、その節は世話になつた」

「医師として、当然の務めです」

「彼女」——サラ・ダンテス中尉と共に屋上からの援護射撃を続けるライアンは、怪我も厭わず戦闘を続行するアメリカ海軍兵士の勇姿を見遣り、微かに笑みを零す。これほどタフな患者は流石に初めてだ、と。

「ノエル、カイル……お前達を死なせはせん！」

——非番の日を利用してラクーンシティを訪れた際に巻き込まれて以来、街を襲うゾンビ達を掻い潜り脱出を目指していた彼女は、混乱の中で蛙の様な風貌の怪物と遭遇し

ていた。

ハンター、通称「フロッガー」。そう呼ばれる件の怪物との戦いで負傷し、窮地に陥っていた彼女を救つたのが、当時のカイル達だつたのである。特にノエルとは、蛙型の怪物に対する嫌悪感を共有したこともあって、すぐさま意気投合していた。

そんな彼らが、あの巨漢に追い詰められている。ならば今は、正体の詮索など後回し。まずは奴を撃退し、2人を救う。

それがこの瞬間、サラが自分自身に課した最優先事項であつた。下で廃車に身を隠して戦つているユウスケも、同じ考えらしく——かつて同僚だつた彼らは一瞬視線を交わすだけで、互いの意図を汲み取つている。

「……サラ！」

「ああ、行くぞユウスケ。……頭上を取るのは戦いの鉄則。篤と思ひ知れ、団体だけのデカブツが！」

2人の兵士が、同時に発砲したのはその直後だつた。弾切れになつたMP5を投げ捨てグロツク17に切り替えたサラは、同じくSIGを構えているユウスケと共に、タイラントの頭部に火力を集中させていく。

「ようカイル、まだ生きてたとは驚きだぜ。ノエルだけ搔つ攫つちまおうつて思つてたんだが……思わぬオマケが残つてたもんだ」

「……その減らず口、やはりメインソングか。無事だつたのは良いが、何しに来た」

「何しに来たとはご挨拶だな。これでも俺の任務は、お前らの救助なんだぜ？ ……隊がどうなろうが、俺は俺の仕事をするだけさ」

そんな中。最初に参戦したエドウインに続くように、コンクリート壁の大穴からは、もう1人の「軍人」が現れていた。艶やかな黒髪を靡かせる切れ目の青年は、ノエルの美貌を一瞥した後、やや疎ましげにカイルの方へと視線を移す。

皮肉混じりな軽口を叩きながら、M4カービンを手に飛び出して来た、その男は——アンブレラ社が擁するバイオハザード対策部隊「U・B・C・S・」の隊員、メイン・アークライトだつた。

ラクーンシティに取り残された市民の救助という任務を帯びていた彼は、所属していた隊が全滅した今もなお、愚直に軍務を全うしようとしているのだ。その誠実さに対しでは、今ひとつ反りが合わないカイルも認めている。

「腕前に反したその無駄口の多さ、相変わらずのようだな」

「へつ、あんたの堅物つぶりもな。……ここに救助ヘリを寄越すよう連絡はしてある。尤も、先にあのデカブツを追つ払わなきゃあ、呑気に乗り込む暇もねえだろう」

「ならば我々の作戦目的は一つだ。あのデカい的に、ありつたけの弾丸を叩き込む」「……やれやれ、あんたの指示はいつも大味過ぎんだよ」

かつての上官であるエドウインの横に並び、共にタイラントを撃つメイソンは、憎まれ口を叩きながらも微かに笑みを零していた。どこか、過去を懐かしむかのように。

——彼らは皆、かつてカイル達と共に死線を潜り抜けてきた、ラクーンシティの生存者達サバイバーズであり。脱出を目指し街を駆け巡る中、タイラントという怪物を目の当たりにして、ここまで駆け付けて来ている。

そんな彼らを代表するように、エドウインがM870をリロードしながら、カイルとノエルの前に駆け寄って来た。

「カイル、ノエル、待たせたな。……その様子を見るに、エドガーの奴は……」

「ええ……彼は最期まで、立派な警官だつたわ」

「……そうか。ならば俺達で、『ケリ』を付けてやらないとな」

「もちろんだ。……手を貸してくれ、皆！」

カイルの真摯な眼に、集つた生存者達は口では何も答えず。タイラントへの攻撃を以て、「了解」の意思を示す。

いぢいぢ言葉など交わすまでもない、ということだ。彼らは元々、そのつもりでここまで来たのだから。

「……しかし、妙ですね。あの怪物、カイル達を狙っているというよりは……邪魔だから、こちらを排除しようとしているようにも見えます」

「邪魔だから……？　どういうことなんだ、ライアン！」

「それは——ツ!?」

だが、その総力戦の最中。タイラントの拳動に違和感を覚えていたライアンの呟きに、カイルが顔を上げた瞬間。

「ぐおああツ！」

「カイルツ！」

瞬く間に間合いを詰めてきた巨漢の拳が、引き金を引く間も無く彼を打ち据えてしまう。そして、転倒するカイルの頭を一気に踏み潰さんと、タイラントが片脚を振り上げた——その時。

「ダメええええつ！」

「……ツ!?」

突如、物陰から飛び出してきた1人の少女の悲痛な叫びが、この一帯に響き渡り。人の声になど耳を貸すはずのない、理性なき怪物が。僅かに、動きを止める。

その隙に地を転がり、M92Fを構えながら間合いを取つたカイルは——声の主の方を見遣り、目を剥いた。

「カイル！　ノエルツ！　大丈夫っ!?」

「なツ……!?」

「アリシア……!? どうしてここに！」

「バ、バめんなさい。私、どうしても2人が心配で……」

心配げな表情を浮かべながら、建物の陰から現れた少女に、カイルだけでなくノエルも瞠目する。

雪のように白い髪をボブカットに切り揃えた、その小柄な美少女の名は——アリシア・セレスティアル。

なぜかゾンビ達には見向きもされず、その一方で爬虫類のような怪物達に狙われ続けていた、不思議な少女だ。彼女も過去にカイル達に窮地を救われた身であるが——爬虫類型生物「ハンターβ」に襲われ、重傷を負っていた。

そのため、比較的安全な建物に匿っていたライアンが、手当てしていたはずなのだ。しかし、今の彼女は重傷どころか、擦り傷一つ見当たらない。

「アリシア、君は一体……ッ!?」

しかも、透き通るような碧さだった彼女の眼は、赤みを帯びた黄色に変色している。ゾンビになつた過去の「患者達」とは全く違う「症状」に、ライアンが息を飲む中——タイラントの動きに、変化が現れた。

「……ッ!? こいつ、動きが！」

「まさか……狙いはアリシアだつたのか!? クソツ、なんとしてもあの子に近付けさせ

るなツ！」

両腕で銃撃の嵐を凌ぎながら、トレンチコートの巨漢はアリシアに狙いを定め、悠然と歩み出す。

「ひつ……！ カ、カイルツ、ノエルツ……！」
「アリシアツ！」

一 気弱な性格ながら、カイル達の身を案じ、恐怖を堪えてここまで辿り着いた少女は——自分に迫ろうとしている巨大な「暴君」を前に、声にならない悲鳴を上げていた。

——T——ウイルスとは比にならない威力を持つ、G——ウイルス。

アンブレラ社に属する研究員「ウイリアム・バーキン」によつて生み出された、その未知のウイルスに感染し。完全に適合してしまつた希少な存在である彼女こそが、タイラントの「目的」だつたのである。

G——ウイルスの影響による、驚異的な再生能力。その発露を嗅ぎつけ、タイラントは「戦闘」よりも「回収」を優先しようとしているのだ。

カイル達の中に、その真相を知る者は1人もいない。が、このままではアリシアが危ない、ということだけは誰もが理解していた。

銃を持つ者達全てが、その火力を一点に集中させ、タイラントを阻止せんと抗う。だが、追い求めていた獲物を前に「本気」を出した巨漢は怯むことなく、前進を続ける。

——そして、その巨大な腕が、少女のか細い身体に、伸びる瞬間。

「はあッ！」

丸太のように太い巨漢の腕から、鮮血が噴き出し。その脇を擦り抜けるように、人影がアリシアを攫う。

すれ違ひ様にタイラントを斬り裂き、アリシアを小脇に抱えながらその場を脱したのは——長い黒髪を靡かせる、一振りの「刀」を携えた日本人だつた。

「ジ……ジン!?」

「随分と手こずっているな、カイル。お前らしくもない」

彼の名は、ジン・シラハマ。ラクーンシティにT—ウイルスが蔓延する直前、「銃弾を刀で斬る」という主旨のテレビ企画に出演するため、街を訪れていた日本の剣術師範だ。ゾンビの大量発生に伴う混乱の中でカイル達と共に闘し、意気投合していた彼もまた、この場に駆けつけて来たのである。

「ジン！ 奴の狙いは……！」

「分かつていて。この子の保護は俺に任せて、お前達は持てる物全てを撃ち放て！」
「へつ……だ、そうだ。サムライ様の仰る通り、派手にブチかましてやろうぜッ！」

「全員、一斉射撃だ！ この場で一気に仕留めろッ！」

もちろん、腕を斬られた程度で立ち止まるようなタイラントではない。暴君の名を冠

する巨漢はゆらりと振り返り、アリシアを抱えるジンに襲い掛かる。

だが、ジンは剣客ならではの素早さでタイラントの腕をかわし、巧みに距離を取り続けていた。そんな彼の叫びにエドウインとメイソンが応じた瞬間、この場にいる生存者達全員が、狙いを「一点」に定める。

今こそ、決着を付ける。その目的を一つに、戦士達は引き金を引き続けていた。

「カイル、今よツ！」

「ああッ！　——うおおおツ！」

仲間達の援護射撃に、タイラントは僅かながら後退し始めていた。この機を逃す手はない。

M1911A1を撃ち続けるノエルの声に応じて、カイルは雄叫びと共に持てる全ての銃弾を、タイラントの巨体に撃ち込んで行つた。

——その銃が似合う警官に。S·T·A·R·S·に相応しいヒーローに。

今は亡き師と友と、交わした約束を胸に。彼の手に握られたM92F^{サムライエッジ}が、絶え間なく火を放つ。

共に死線を搔い潜ってきた仲間達も、その後に続き己の得物を巨漢に向ける。そして——カイル達全員の弾丸が尽き。全力の一斉射撃が、ついに終わる頃。

「……！」

硝煙に巻かれるように。トレーンチコートの巨漢は、その姿を完全に消してしまった。

跡形もなく碎け散つたのか。勝ち目がないと逃げ出したのか。——あるいは、見逃して貰つたのか。

「……カイル」

「ああ。……終わつたな、ノエル」

物言わぬ怪物が相手である以上、それは分からぬ。だが、生還という名の勝利を手にした事実だけは、搖るぎないものであつた。

「……フォレスト。エドガー。……俺はまだ、生きるよ」

生存者達全員の頭上を飛ぶ救助ヘリのローター音が、それを確信させている。眩い夜明けと共に戦いの終幕を悟つた彼らが、朝陽に照らされる各々の得物を降ろしたのは、その直後のことであつた。

——そして、1998年10月1日。

彼らを乗せた救助ヘリが、街を離脱してから数日も経たないうちに。

ジル・バレンタインの脱出と時を同じくして、大統領の命による滅菌作戦「コードX_{ダブルエックス}X」_Xが決行され——ラクーンシティは核の炎により、跡形もなく消え去つた。だが。それは、新たなる生物兵器との戦いの幕開けに過ぎなかつたのである。

人類を苛む惨劇はまだ、終わりではない。



それでも、「彼ら」は戦い続けているのだ。

どんな恐怖も、悪夢で終わらせない。そのために現在も、銃を取り抗い続けている。「カイル、準備はいいか」

「ああ。……行こう、クリス」

セ セ
バ キュ
イ オ テ リ
オ テ 口 対 策 部 隊 と し て 創 設 さ れ た、 Bi
セ キュ
ア セ
ス エ
ス メ
ス メ
ン ト
ス メ
ン ト
A s s e s s m e n t — A l l i a n c e — 通称、「B S A A」。

元 S·T·A·R·S·であるクリス・レッドフィールドの誘いを受け、そのメンバーに加わったカイル・グリーンホークは、あの日からの「約束」を、頑なに守り続けている。

かつて肩を並べ、あの地獄を乗り越えたエドウイン・サンチエス。

ライアン・ハワード。

シリファ・カーレイン。

ジョン・エリオット。

ルーク・ステルベン。

ユウスケ・ユキハラ。

サラ・ダンテス。

メイソン・アークライト。

アリシア・セレスティアル。

ジン・シラハマ。

そして、ノエル・スプレイグ。

彼らに恥じぬ、「ヒーロー」で在るためには。

長年の付き合いになる、

相棒のM92Fを

サムライエッジ

握り締めて――。